

# Eureka XIII

六年制通信 No.27 令和7年11月21日(金)号

## 樽の中のワイン

受験生諸君は共通テストが終われば二次対策や私立大学の試験に忙しくなり、あつという間に卒業式を迎えることになります。先日6年生の諸君にBHで話す機会があるって、考えてみればもう彼らに親しく話をすることもないのだなと考えると、ちょっと寂しくなります。卒業証書も、本音を言えば、手渡したいのですが、それはまあ、仕方のないことです。BHでは、社会に出ると誰もが何らかの壁にぶつかるものだが、そのたびに私たちは言葉にすがり物語にすがって自分を鼓舞し壁を乗り越えようとする、私もそうだった、だから若いうちにたくさんの言葉や物語を知ってほしいという話をしました。私は六年制の諸君がみんな同じように覚えて卒業する言葉や物語があつてほしいと思います。いつか君たちに子どもができた時、こんな話を昔習ったんだよ、こんな言葉があつてね、と君たちが自分の子に話してほしいですね。

さて、「人は生きていく上でパンよりも物語を必要とする時がある」というのは私の体験的に真実です。今日も一つ二つ物語を紹介しましょう。

一つ目はユダヤの民話です。

山奥のユダヤ人の村に、新しいラビ(ユダヤ教における宗教指導者)が着任することになった。村人たちはラビが着任する日に、祝いの宴を開くことにした。ユダヤ教会堂の中庭に空の樽を用意し、前日までに村人それぞれが一升分の酒を樽の中に注ぎ入れておくことにした。当日までに樽はいっぱいになった。新任のラビが到着すると、村人たちはラビを住まいに案内した。そして、ユダヤ教会堂に案内して、祈りを捧げた。その後、祝いの宴となった。しかし、どうしたことだろう、樽から注いだ液体はまったく酒の味がない。それはまるで水のようだった。長老たちは新任のラビの手前、戸惑い、恥じ入った。突き刺すような静寂が立ち込めた。しばらくして、隅にいた貧しい村民が立ち上がって言った。

「みなさんに告白します。実は、みんなが酒を注ぎ入れるだろうから、わしが一升分ぐらい水を入れたって、誰にも分からないだろう。そう思ったんです」。間髪を入れず、別の男が立ち上がった。「実は、おれも同じことを…」。その後、次々に「わしもです」「おれもです」と言いだし、とうとう村人全員が同じことをしていたことがわかった。

これは社会心理学でいうところの「リングルマン効果」ですね。つまり集団になると人は怠けるという現象を指すのですが、要するに一人の時にできる仕事量が5だったとすると、10人いると×10で50の仕事ができるはずなのですが、実際にはそれが40や30になってしまふわけです。誰かが、ほとんどの場合複数の人が一人の時以下の仕事しかしていないのです。綱引きがよく例に出されるのですが、1対1の時には

全力を出せるのに 10 対 10 では「自分一人が少しくらい手を抜いてもいいだろう」と思うものらしいのです。皆さんは心当たりありますか。掃除など、そういうところが出そうですね。違いますか。私たちには、いわゆる One for all. All for one. 「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という価値観を持ち続けるのは難しいのでしょうか。もしそうなら、それは人間の弱さだね。昔は賞賛された「俺がやらなきゃ誰がやる」という気概も「俺がやらなきゃ誰かやる」という無関心になると、ただただ情けなく恥ずかしいことですからね。

もう一つ、イソップ寓話の変形でしょうかね、これは。

春先になって、ひばりが麦畠に巣をつくった。初夏のある日のこと、大勢の村人たちが麦畠にやってきて、「そろそろみんなで麦を刈らなきゃいかんない」と話していた。これを耳にしたひばりの子どもが「お母さん、麦刈りが始めるから、引っ越しをしようよ」と言った。しかし、ひばりのお母さんは「まだ、大丈夫よ」と答えて平然としていた。数日たってから、三人の村人が麦畠にやってきて、「ぼちぼち、麦を刈らなきゃいかんない」と話していた。これを耳にしたひばりの子どもは「お母さん、もうダメだよ！ 麦刈りが始まってしまうよ」と叫んだ。しかし、ひばりのお母さんは「まだ大丈夫よ」ととり合わなかった。

さらに数日後、今度は村人が一人だけでやってきて「じゃあ、ぼちぼちやるか」とつぶやいた。そこではじめて、ひばりのお母さんは子どもに言った。「さあ、逃げましょう」

これもリングルマン効果を反対から言っているような物語です。「みんなでやろう」は「本気でやろう」にはなりにくいということを言っているように私には思えます。他人はどうあれ、自分一人でもやるとなったとき物事は進むのでしょうか。

### 今週のおすすめ

- ・青山美智子 『月の立つ林』 (ポプラ文庫)

この人、そのうち直木賞をとるでしょうね。私、好きだな、この作家。ポプラ文庫は馴染みがないかもしれません、装丁が素敵ですよ。

月のはじめを「ついたち」というのは、「月の立つ」日というものが語源だとこの本で紹介されていたので、『新明解語源辞典』で確認したらそう書いてありました。ついたちを「朔日」とも書きますね。そう言えば「朔日餅」でしたかね、あれは。

ポッドキャストというラジオ番組のようなものがあることも知りました。ここで「ツキない話」を発信しているタケトリ・オキナ。月にまつわる蘊蓄が毎回発信されている。お決まりの「かぐや姫は元気かな」から始まるラジオは、この連作短編集に欠かせない。「朔」という字も伏線になっています。

病院を辞めた看護師と役者を目指す弟、コンビ解消後全く鳴かず飛ばずでアルバイト生活の芸人、娘が急に結婚すると言い出して自分の心を持て余す父親、自立するためバイクを買う女子高生、夫や姑との関係がうまくつくれないアクセサリー作家など、これは彼ら彼女の物語であり、私たちの物語でもあるように思います。

ラスト、全てが繋がって、それぞれが再生を果たしていくあたり青山さんの真骨頂ですね。この方、すでに何冊か紹介していますから合わせて読んでみて下さいね。